

## 第二章

### 青春の情熱

故郷・長崎で教師となり、そして、暁星学園の青年校長に



## アイスクリームで生徒の心を開かせる

1955年(昭和30年)10月帰国。当時の日本は、自由党と民主党が合同して自由民主党が結成され、神武景氣が始まった頃でした。翌年には「もはや戦後ではない」という言葉が流行。ソニーのトランジスタラジオが発売され、街頭テレビに人々が集まっていました。一般家庭では、まだ高嶺の花だった白黒テレビ、電気洗濯機、電気冷蔵庫が、3種の神器と言われていた時代でした。戦後の混乱が収まり、貧しいながらも活気が出てきた頃だったのです。

自身は渡欧前も帰国後も修道院の生活ですから、5年たっても何も変わつたことはありません。ただ、一般の人々の暮らしが少し豊かになったという感じは受けました。

帰国すると、すぐ、長崎海星学園の高校の教師の辞令が出て、長崎へ向かいました。海星学園は、長崎港を一望できる山手にあり、教室からも校庭からも、キラキラと輝く海を見ることができました。学校では、毎週20時間、宗教や倫理の授業を担当することに。最初に教室で生徒を見て思ったのは、この生徒たち全員を改心させてやろう、ということ(笑)。29歳で初めて教壇に立つたわけですから、情熱に燃えて熱心に教えめました。熱血教師ですよ(笑)。宗教の時間には、賛美歌をプリントした手作りの歌集を配って歌ったりしました。授業の準備のために、一生懸命ノート作りもしました。

生徒を改心させる、という野心があつたから、放課後も毎日指導しました。生徒を呼んで、宗教の話をして、お茶を飲ませてあげたり、切手をあげたり。土曜日は午後から生徒たちと一緒に遊んで、日曜日でもミサに呼んで、その後野球をしたり散歩をしました。

長崎は殉教の歴史がある土地だから、キリスト教は耶穌教、邪宗門、悪い宗教という考えが人々に染み込ん

でいました。大都市だから、付き合いも狭いでしょう。生徒が洗礼を受けたいと言っても、親が大反対するような土地であり、時代でした。それが、また、若い私の闘争心をかきたて、キリストの弟子になつたつもりで、みんなを回心させる、と本気で思っていました。

生徒の心をつかむために、いろいろな工夫をしました。例えば、スイスでの夏休みを参考にしたコロニー・ド・バカンスを、雲仙や五島列島、鹿児島海岸などでやつたんです。夏休みの2、3週間、希望者を山や海に連れて行つて合宿。自然の中でキャンプして、一緒に楽しく遊んで、時々、宗教のお話をして(笑)。

地方から来ている生徒たちは喜びました。お金が出せない生徒はタダ。夏休みに、私が教会に行つてお説教するとお礼が出るので、許可をいただいてそのお金を生徒たちのために使つたんです。当時のことから、海水浴に行くにしても海水パンツを持っていない生徒がいるから、デパートに行つていろいろな大きさの海水パンツを買つて来て、好きなものを選ばせました。生徒たちは「うあ、よかった」「泳ぎにいい」「うれしか」と言いながら、海水パンツに飛びついていました。

人の心をつかむためには、いろいろお金が必要になつてくるんです(笑)。まじめな話ばかりをしていても、聞いてくれないでしょう。友達付き合いだつて、お茶を飲んだり食事をしたりするじゃないですか。だから、生徒と一緒にお茶を飲んだり、食事したり、遊んだりしました。

私は後に東京の暁星学園で校長になつてからも、修学旅行に行つた時などは教師に出る手当てで、生徒たちにお菓子を買つたりしました。それは、たかが1個100円のアイスクリームのことなんですけれど、いまだに「先生がアイスクリームを買つてくれて、うれしかった」という人がいます。

人間の心つて不思議なもので、どうしても相性の悪い人間はいるもの。先生と生徒もそうです。見ただけで「目つき悪いな」とか思つて、できれば話なんかしたくないというのが本心。でも、それでは生徒の心をつか

